

インド仏教遺跡めぐり

人生の悲しみ、惨めさ、痛みそして死を目の当たりにしたシッダールタ王子は、青春の最盛期にそれらの原因と解決法を見出す決意をしました。

恵まれた生活や家庭、家族をもなげうって旅に出たシッダールタは、菩提樹の下で不動の瞑想の後、ついに悟りの境地へと達しました。

その後は自ら悟った真理を説法し、弟子たちに終わりなく繰り返される生と再生の苦悩に終止符を打つべく、八正道に従うようにと熱心に説いたのでした。

ブッダの生涯と教え、さらには仏教がインド全土および国境を越えた地域にまで与えた影響を、主要仏跡や仏教修道の学府などを重点に紹介いたします。



今から2,500年前に

地上をさまよい歩いた一人の王子が
解脱を果たした説法者へと
驚くべき変貌を成し遂げた
ブッダの足跡



Incredible India
インクレディブル ● インディア

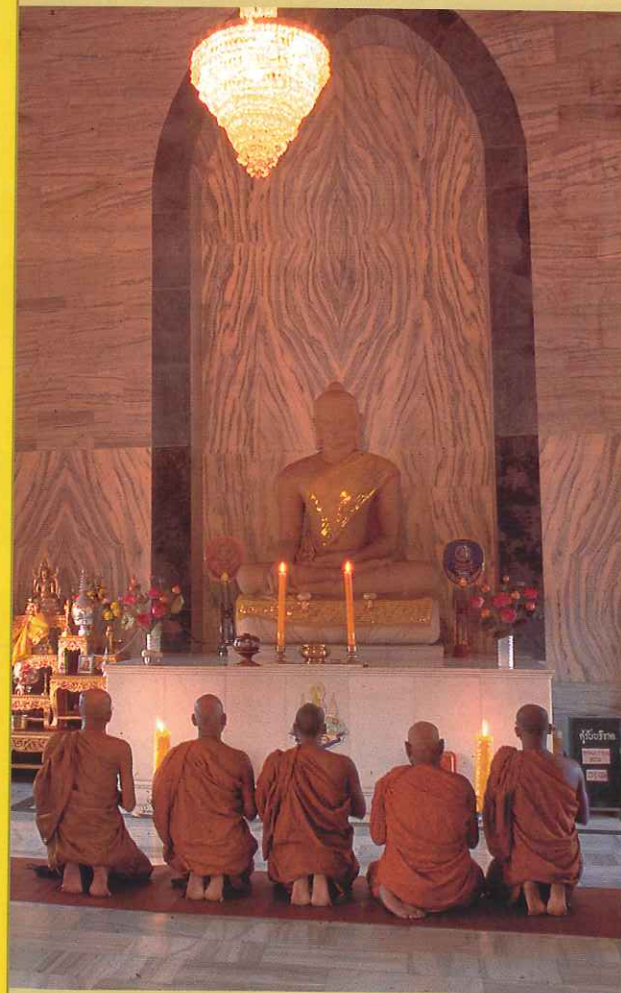
インド政府観光局 Indiatourism, Tokyo

〒104-0061 東京都中央区銀座6-5-12 アートマスターズ銀座ビル
Art Masters Ginza Bldg., 6-5-12, Ginza, Chuo-ku, Tokyo 104-0061, Japan
TEL: 03-3571-5196/97 FAX: 03-3571-5235
E-mail: indtour@smile.ocn.ne.jp
Website: <http://www.incredibleindia.org>

Printed in Japan September, 2009

NOT FOR SALE

インド 仏教遺跡巡り Buddhist Shrines in INDIA



Incredible India
インクレディブル ● インディア

インド政府観光局
Indiatourism, Tokyo

釈尊の足跡をたどって —— 仏教聖地の巡礼

天竺への憧れ 過去1500年のあいだ、日本人の宗教と日本文化の精神の中核となってきた仏教。その仏教の開祖である釈尊が、お生まれになり、悟りを開かれ、法を説かれ、入滅された地インドを、日本人は古くから「天竺」と遠く仰いできました。しかし、かつての遠い遥かな国「天竺」も、今はジェット機でわずか9時間あまり。釈尊の足跡をしのばせる数々の仏教聖地は、世界各国の巡礼客で賑わっています。

釈尊の誕生 釈尊は、約2500年前、ヒマラヤの南麓を領していたシャカ族のスッドーダナ王（浄飯王）の長子として、ルンビニー園でお生まれになりました。王の都は、ネパール国境近くのカピラヴァストゥにありました。

出家と成道 29歳で出家した釈尊は、真の幸福と無情の知恵を求め、師を尋ねて当時の新興マガダ国の中心部に赴きました。しかし、いずれの師の説にも満足できず、ブッダガヤ近くでの6年に及ぶ苦行も実りませんでした。そこで苦行を中止し、近くのナイランジャンナ河（尼蓮禪河）で水浴し、植物を摂って菩提樹下で禅定にはいり、まもなく無上の悟りを開かれ、ブッダ（覚者）となられたのです。

説法 バラナシは当時から歴史の古い都で、さまざまな出家修行者の集まる最大の宗教センターでした。その北郊の鹿の

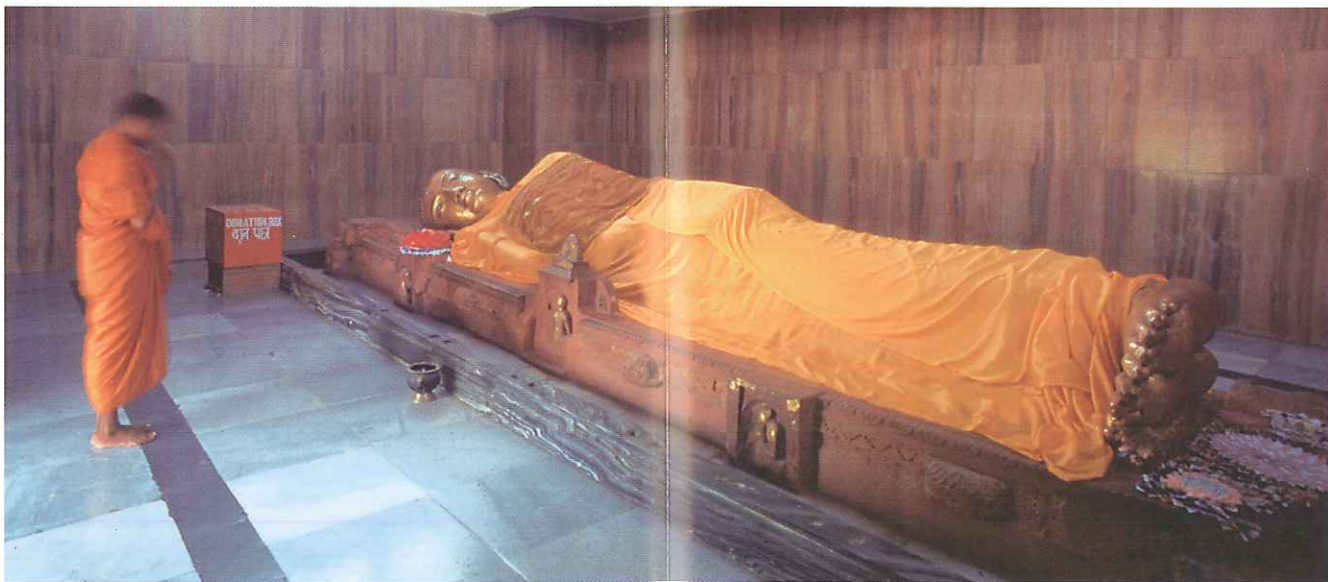
園（鹿野苑、現在のサルナート）で、釈尊はお悟りになった無上の法を初めてお説きになりました。これが初転法輪で、仏教教団の始まりです。以来45年間、釈尊は、マガダ国の首都で霊鷲山や竹林精舎のあった王舎城（ラジギール）、コーサラ国の首都で祇園精舎のあった舎衛城（シュラヴァスティ）、リッチャヴィ族の首都ヴァイシャリ、ゴーシタ園のあったヴァツァ国の首都カウシャンビーなど各地で、多くの人々に教化され、80歳でクシナガラで涅槃に入られました。

入滅 釈尊は、侍者アーナンダ（阿難尊者）を伴って王舎城から最後の旅に出られました。その途上、ヴァイシャリで雨安居を過ごされたとき、重い病にとりつかれましたが、おそらく郷里のカピラヴァストゥに向かって、旅を続けられました。しかし、マッラ族の都クシナガラの郊外にお着きになったとき、二本のサーラの樹（沙羅双樹）の間に横たわれ、ついにここで入滅されたのです。これを祠った塔（ストゥーパ）を各地に建てて釈尊を偲び敬いました。

仏教聖地 釈尊の生誕、成道、初転法輪、入滅の地を四大聖地、これに王舎城、舎衛城と祇園精舎、ヴァイシャリ、サンカシャを加えたものを八大聖地と呼んでいます。

釈尊の成道の地 ブッダガヤ

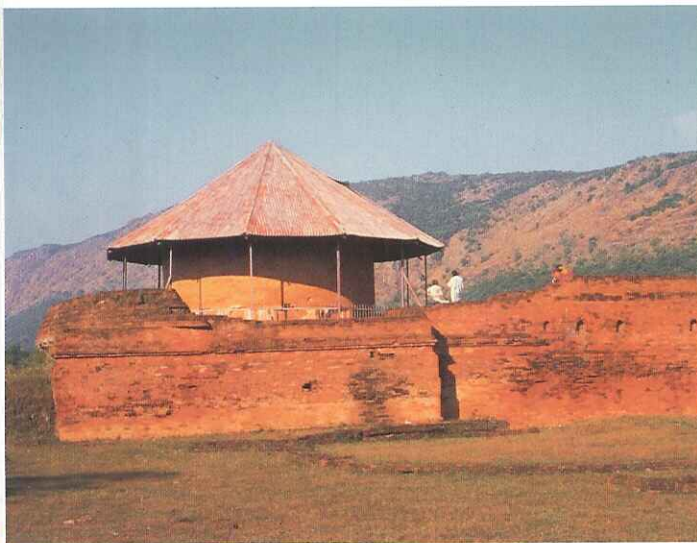
釈尊が菩提樹下で禅定を修せられ、成道された地で、仏教における最も重要な聖地です。その菩提樹と台座（金剛宝座）を祀るのが大菩提（マハボディ）寺です。前3世紀のアショカ王の頃に最初の祠堂が建てられ、現在の形になったのはほぼ4世紀以降のことです。釈尊成道以来連綿と伝えられた菩提樹と、紀元前1世紀頃の台座とが、大塔の西側に祀られています。大塔のまわりの欄楯柱には前2～1世紀のものがあり、近くの考古博物館にも展示されています。大菩提寺の東には尼蓮禪河が流れ、釈尊はこの対岸の前正覚山の山中で苦行されたともつたえられています。日本をはじめ、タイ、ビルマなどの寺院が大菩提寺のまわりに建てられています。



釈尊時代のマガダ国の首都・王舎城

ラジギール

五つの山に囲まれた要害堅固な盆地が、釈尊在世当時のマガダ国の首都、ラージャグリハ（王舎城）の旧都です。盆地の東南の斜面に、有名な霊鷲山が天空にそびえ立ち、頂上には、釈尊が起居されたという岩窟や説法されたという場所があります。旧都の北門付近には、竹林精舎址、カラ ندا池、ピッバラ窟など釈尊ゆかりの遺跡、第一結集の行われた七葉窟やアジャータシャトル王の新王舎城があります。旧王舎城内には、ジーヴァカ果樹園址、ビンビスアラ王の囚われた牢獄址などがあります。



古代インドの仏教大学址

ナーランダ

釈尊の高弟シャーリプトラ（舎利弗）の生地といわれ、釈尊も何回か訪れたと、ある文献は言っています。現在、東西250m、南北600mの壮大な大学址が遺されています。

5世紀に創建されてから12世紀にイスラム教徒に破壊されるまで、全アジアの仏教研究・教学の中心でした。玄奘が滞在した7世紀には1万人もの学僧がここに住んでいたと言われます。11の僧院址と14の寺院址があります。



釈尊を外護したリッチャヴィ族の都

ヴァイシャリ

ガンダキ河畔にあり、釈尊在世当時、商業の栄えた大都市でした。釈尊はしばしばこの都市を訪れ、逗留されました。娼婦アムラパーリのマンゴー園寄進や、猿の群が釈尊の鉢に蜜を取り供養したことなどで有名です。旧都城址、マウリヤ時代以前に起源をもつストゥーパ、アショカ王石柱とその傍の猿の掘った池などが見られます。



釈尊がはじめて法を説かれた地

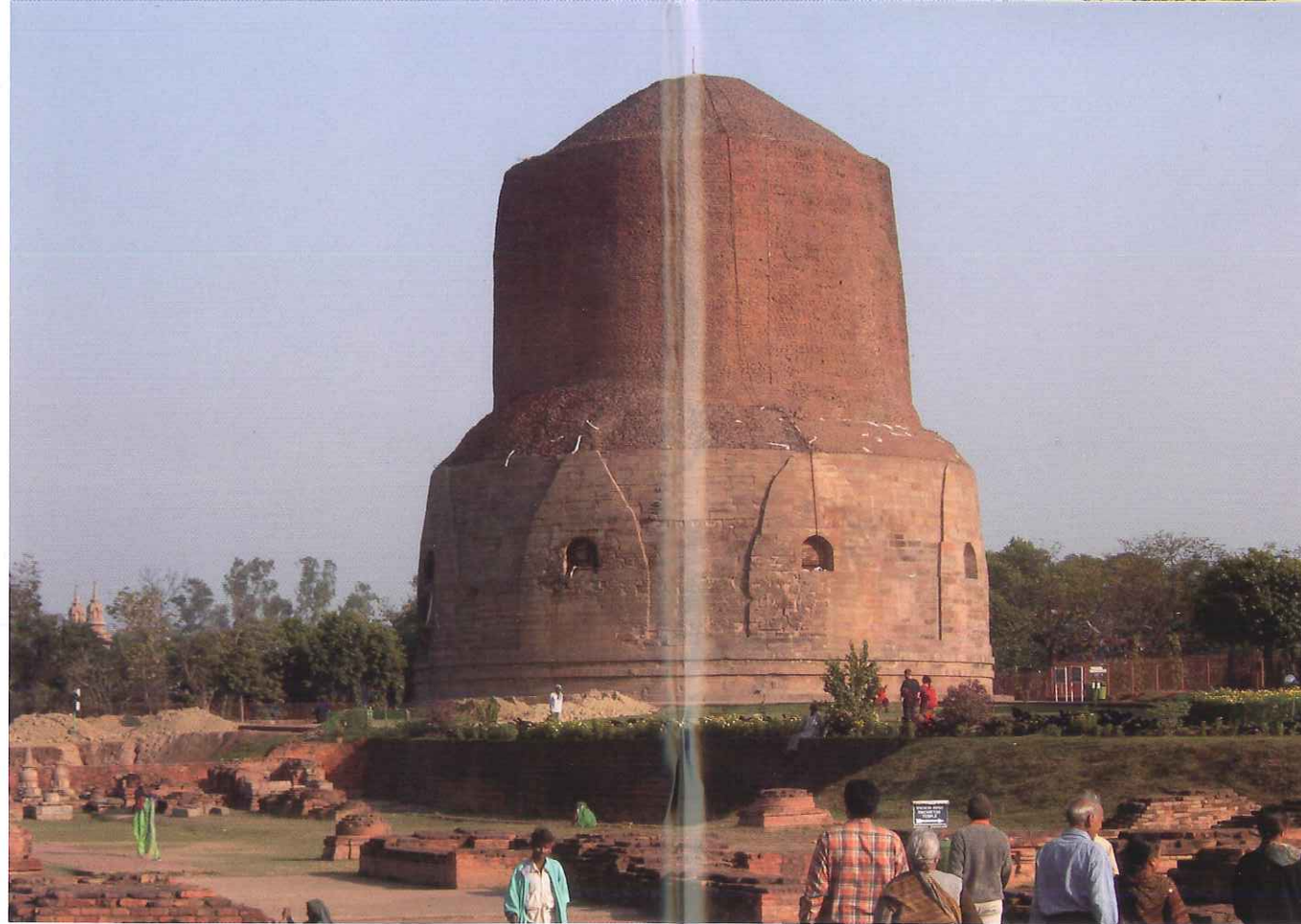
サルナート

初転法輪の地といわれ、仏教教団発祥を記念する重要な聖地で、静謐で美しい遺跡公園と博物館から成っています。アショカ王時代から12世紀にいたる数々のストゥーパや僧院址があります。二重円筒形の巨大なダーメク塔は、6世紀頃に増広されたストゥーパです。公園の東端に、野生司（のうす）香雪画伯の壁画で有名なムラガンダ・クティ寺院があります。インドの至宝、初転法輪像、アショカ王柱頭をかざる考古博物館から南880mにあるチャウカンディ・ストゥーパは、かつて苦行を共にした5人の修行者が釈尊を出迎えた場所といわれています。

祇園精舎とコーサラ国の首都・舎衛城

サヘット、マヘット

日本人のだれもが仏教的感慨をよせる祇園精舎——それは、コーサラ国のスタック長者（給孤独長者）が祇多太子の園林を買い釈尊に寄進した精舎です。ここで釈尊は24回の雨安居を過ごされ、多くの経を説かれました。サヘットがその祇園精舎址で、釈尊が説法されたと伝えられる台座や後代の多くの僧院址があります。その北東約500mの、城壁に囲まれた一帯が舎衛城（シュラヴァスティ）の址で、マヘットとよばれています。



釈尊が入滅された地

クシナガラ

釈尊が侍者アーナンダにみとられて、沙羅双樹の間に横たわられて入滅されたのがこの地です。ビルマの仏教徒が建てた涅槃堂の前には二本のサーラの若木が植えられています。周囲には、涅槃塔、僧



院址など多くの遺跡があります。約1km東のラマバル塚は、釈尊の遺骸が茶毘に付された跡と言われ、高さ46mの煉瓦積みの塔です。ラマバル塚の北西の川がヒラニヤヴァティー河で、釈尊が最後の沐浴をなさった場所といわれています。



三道宝階降下の伝承の地

サンカシャ

釈尊は、生後7日目に死別した母マヤ夫人に無上の法を説かれるため三十三天（とう利天）に赴き、3カ月の後、三道の宝階をくだってこの地に降下されたと伝えられています。かつて多くの僧院をもつ都城でした。現在、アショカ王石柱の柱頭、大ストゥーパ址が見られます。

釈尊は、生後7日目に死別した母マヤ夫人に無上の法を説かれるため三十



カピラヴァストゥに比定された

ピプラワ

ネパール国境近くのピプラワのストゥーパから、1898年に銘文入りの舎利壺が発見され、近年、さらに古い舎利壺とシーリングが発掘されて、この地がシャカ族の都カピラヴァストゥであるという証拠が見つかりました。約1.5km南のガンワリアの遺跡が王宮址とみられています。仏誕の地ルンビニーは、ここからほぼ東へ14kmの所にあります。





仏教文化の遺産 をたずねて

仏塔と岩窟寺院の旅



釈尊入滅後まもなく、その教えは弟子たちの手によってインド全域に伝えられ、1500年以上のあいだ人々の心をとらえ、全土に仏教文化の華が開きました。敬虔な仏教徒は、釈尊その人に代わる崇拜対象として仏舎利を納めた壮麗なストゥーパ（仏塔）を、仏教聖地だけでなく各地に競って建て、信仰の中心の場としました。マトゥラーでは、1世紀ごろ、仏像の制作も始まりました。西インドでは、岩山の断崖を掘り抜いて、礼拝所（チャイトヤ）と僧院（ヴィハーラ）の組合せからなる岩窟寺院の大殿堂をつくりあげました。大規模な僧院も全土で造営されるようになりました。5～7世紀（グプタ期）には、インド仏教文化はその隆昌の頂点に達しました。豪華絢爛たる彫刻や壁画で装飾されたアジャンタをはじめとする岩窟寺院の壮麗で神秘的な宗教空間、マトゥラーやサルナートのグプタ仏の表情に湛えられた内面の知恵と慈悲の底知れぬ深遠さ——これらの貴重な遺産は、無名の工匠たちの不滅の偉業を伝えるだけでなく、当時の僧侶や民衆の信仰のエネルギーと創造力を、言葉では語り尽くせぬほど、力強くあらわしています。



ブッダの教え八正道 —— この八正道とは正見（正しい知覚）、正思惟（正しい思考）、正語（正しい言葉）、正業（正しい行い）、正命（正しい生活態度）、正精進（正しい努力）、正念（正しい注意力）、正定（正しい瞑想）の8つである。これらを全て実践することができれば、涅槃に到達することが可能になると説いた。



世界に誇るインド仏教芸術の至宝

アジャンタ

アジャンタの岩窟群には、未完成のものも含めて紀元前200年から西暦250年までの間に造られた30の岩窟があります。デカン高原の台地をえぐって蛇行するワゴラ河の渓谷沿い高さ70mの岩壁に、1.5kmにわたって仏教窟が並んでいます。1819年、虎狩りに来たイギリス人(ジョン・スミス大佐)によって千年の眠りからよびさまされました。アジャンタを世界の至宝にしたのは特にその壁画で、豊かな色彩と繊細な筆致で壁面だけでなく列柱や柱頭、天井など広大な空間の隅々まで描かれています。岩窟にはチャイトヤ窟(礼拝所)と、ヴィハーラ窟(僧院)の2つの仏教修道建築があります。チャイトヤ窟は第9、10、19、26、29窟、ヴィハーラ窟はその他25の岩窟です。その洗練された建築様式は、4世紀もの広範に渡り2つの時代に分けられます。第9、10窟のチャイトヤ窟と第8、12、13、15A窟のヴィハーラ窟は小乗仏教期のもので、第19、26窟と未完成の第29窟のチャイトヤ窟と第

1、2、4、6、7、11、14~17、20~24窟の見事なヴィハーラ窟が大乗仏教期のもので、大乗仏教期のアジャンタの彫刻は、当時の形式的な信仰心の比喩的表現を裏づけするものです。一方、小乗仏教期の遺跡にはさほど彫刻が施されていません。

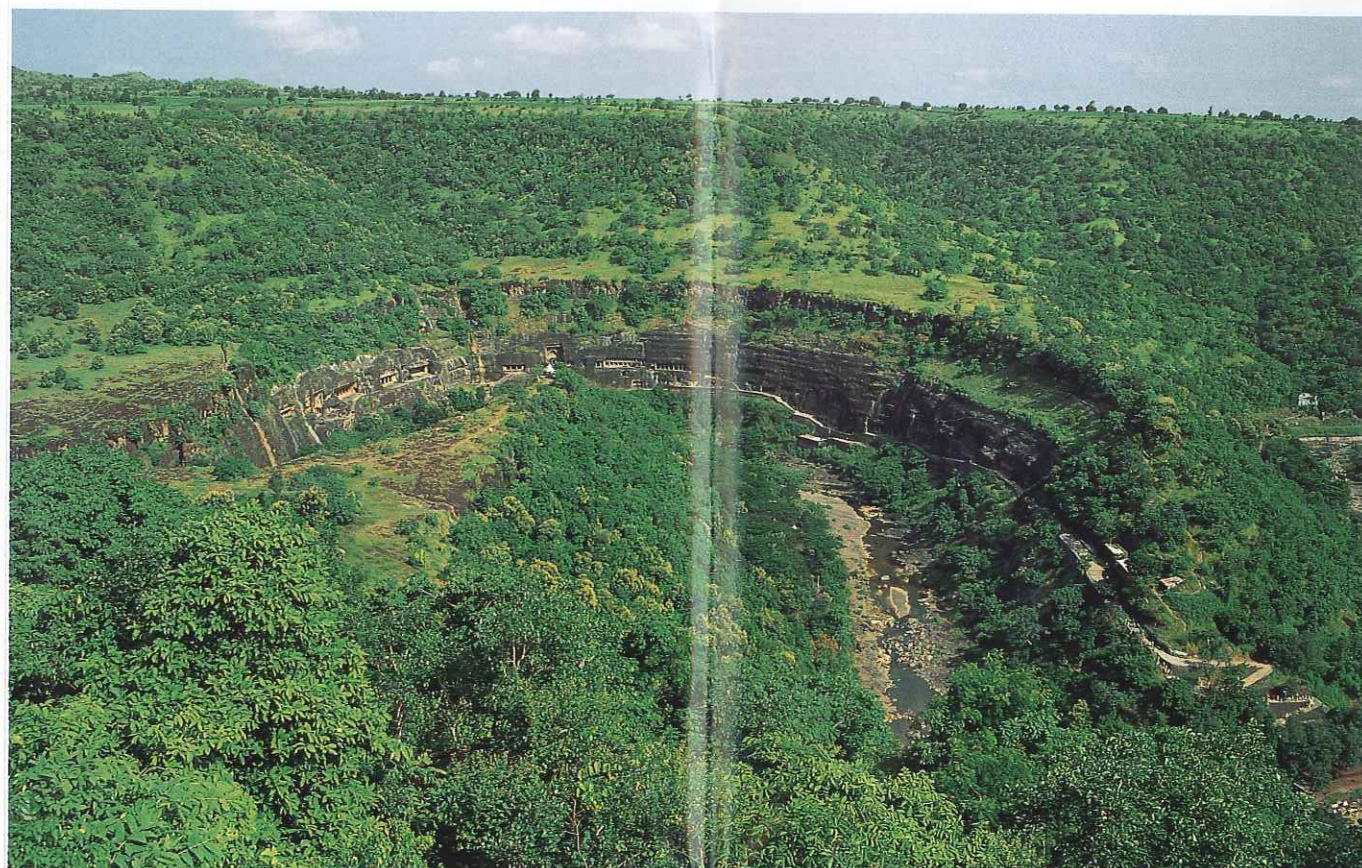
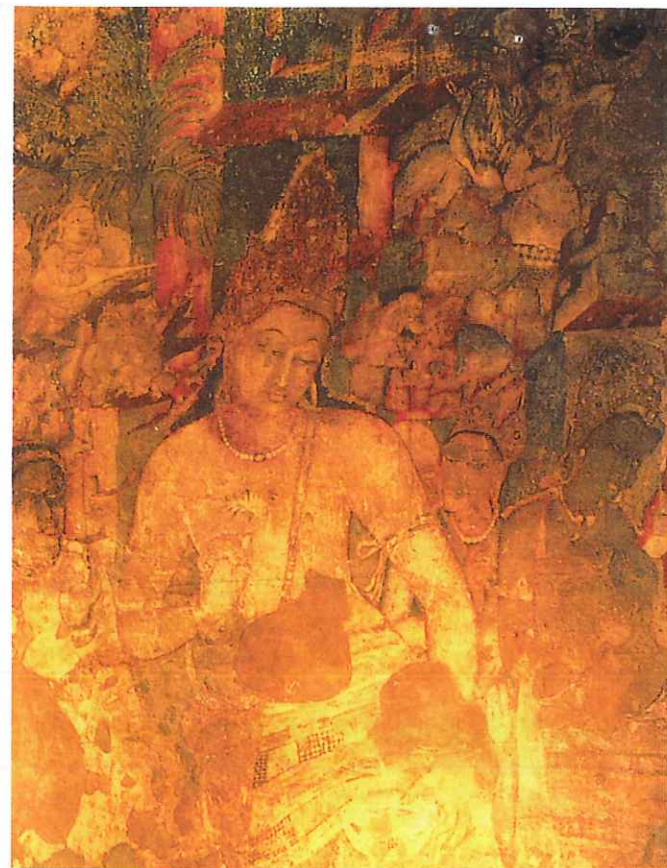
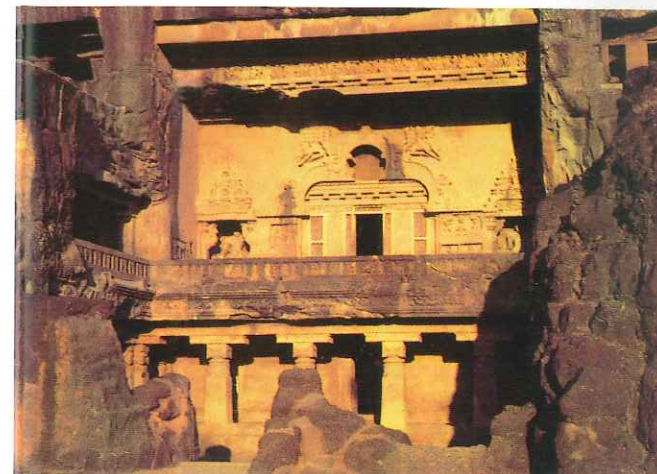
第1窟は最も保存状態の良いヴィハーラ窟のひとつで、壁画の素晴らしさはアジャンタでも第一級です。美しい姿の蓮華手菩薩像と頭に精巧な冠を被った金剛手菩薩像が、本堂の入口を両脇から挟むように描かれています。本堂の側壁には、マーラによるブッダへの攻撃と誘惑、またスラヴァスティの奇跡が描かれ、岩窟の壁には数々の物語に出てくる光景が描かれています。基本構造は第1窟と同じヴィハーラである第2窟では、見事な天井装飾が見られます。そこには様々なデザイン、雲形模様、幾何学模様、ブッダの座像の細密画、ブッダの母が見た夢、マヤ王妃とブッダの降誕、供え物を運ぶ敬虔な女性信者の行列などが描かれています。第10窟はアジャンタ最古の遺跡のひとつであり、紀元前2世紀に西インドに造られた初期仏教チャイトヤ窟の中で最も見ごたえのあるもののひとつでもあります。ここには前期と後期、両方の壁画が残され、サマ・ジャータカ、チャッターンタ・ジャータカの物語の

シーンなどが描かれています。第16窟はアジャンタを代表するヴィハーラ窟のひとつです。内部左手の壁には、ブッダの従兄弟であったナンダの出家物語の壁画があります。他にもスラヴァスティの奇跡、象の行列、妻と子に施しを乞うブッダの姿、ゴータマの初めての瞑想、そしてハスティ・ジャータカとマーハ・ウマーガ・ジャータカ物語の壁画も見ることができます。第17窟には最も多くの壁画が残されています。代表的なものには、8体のブッダが並んだ壁画や天の踊り子たちと雲間を飛ぶ帝釈天の激しく劣化したパネル画、天女と奏者たち、ブッダを妬んだ従兄弟のデーヴァダッタに放たれた荒れ狂った象ナラギリを制止するブッダ、またチャッターンタ、マハマビ、ヴェッサンタラ、スタソマ、マティボサーカ、サマ、ルル、ニグロダーマリガなど多種のジャータカ物語のシーンなどがあります。第20窟はジャータカ本堂が正面廊に突き出した、柱が一本もない小規模なヴィハーラ窟です。第21、24窟はアジャンタの岩窟の中でも最も後期に造られたもので、完成度はまちまちです。第26窟は第19窟に比べて規模的には大きいですが、その他配置や装飾においては相似しています。

偉大な信仰のエネルギーと創造力の結集

エローラ

デカン台地の街道沿いの岩山の斜面に、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教の岩窟寺院が34窟うがたれています。もっとも豪壮なのがヒンドゥー教のカイラーサ寺院(第16窟)。無数の精緻な彫刻をもつ巨大な寺院を、外郭から内部の微細な部分に至までそっくり岩山から掘り抜き、さらに中庭の装飾柱や巨象、楼門、回廊にいたるまで掘り出したもので、高さ30m、奥行90mの大彫刻です。仏教窟は右翼の第1~12窟で3~7世紀の開掘。第10窟は美しいファサードをもつチャイトヤ窟で、他は僧院。特に第12窟は三層からなるスケールの大きなものです。



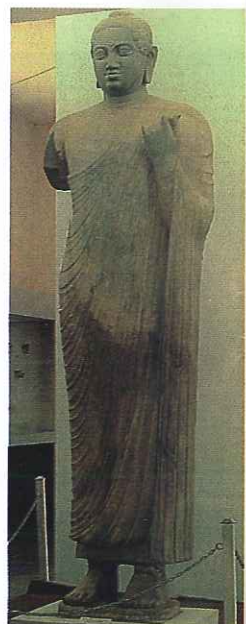
仏教美術の原点 サンチー

地上の楽園のような、美しい田園風景に囲まれた小高い丘の上に、有名な三つのストゥーパがあります。大塔（第一ストゥーパ）は、アショカ王の創建。前2世紀に増広されて現在の姿になりました。大塔をめぐる欄楯には彫刻は施されていませんが、前1世紀に建てられた四方の塔門（トラーナ）は、全面が精細な彫刻で飾られています。主題は、仏伝やジャータカのシーン、優美なヤクシニー、動植物や花の紋様です。釈尊は、傘蓋の下の方、菩提樹、台座、法輪、ストゥーパなどで象徴的に表現されています。第二ストゥーパは丘の中腹にあり、その欄楯には前2世紀の浮彫があります。



南インド仏教の二大センター アマラヴァティとナーガルジュナコンダ

南インドを代表するこの二つの仏教遺跡は、ともにクリシュナ河のほとりにあります。アマラヴァティは河口から120km、サータヴァーハナ朝の首都の一つに近く、前3世紀から14世紀に至まで南インドの大仏教センターでした。前2世紀に造られ、のちに増広された大ストゥーパはサンチーのものより大きく、基壇もドームも華麗な浮彫パネルで覆われていました。今は基壇の一部が残り、遺品は現地とチェンナイの博物館にあって、往時のありさまを偲ばせます。ナーガルジュナコンダはその上流約150km。4世紀頃、イクシュヴァーク朝の首都で、多くの遺跡や緑色大理石による豊富な浮彫を遺しています。下流24kmにダムが建設されて大きな美しい湖が出現し、もとの遺跡はその底に沈みましたが、重要な遺跡と遺物は現在、湖上の島と湖岸に移建、展示されています。



比類ない荘厳・静謐な宗教空間をつくる 西インドの石窟寺院群

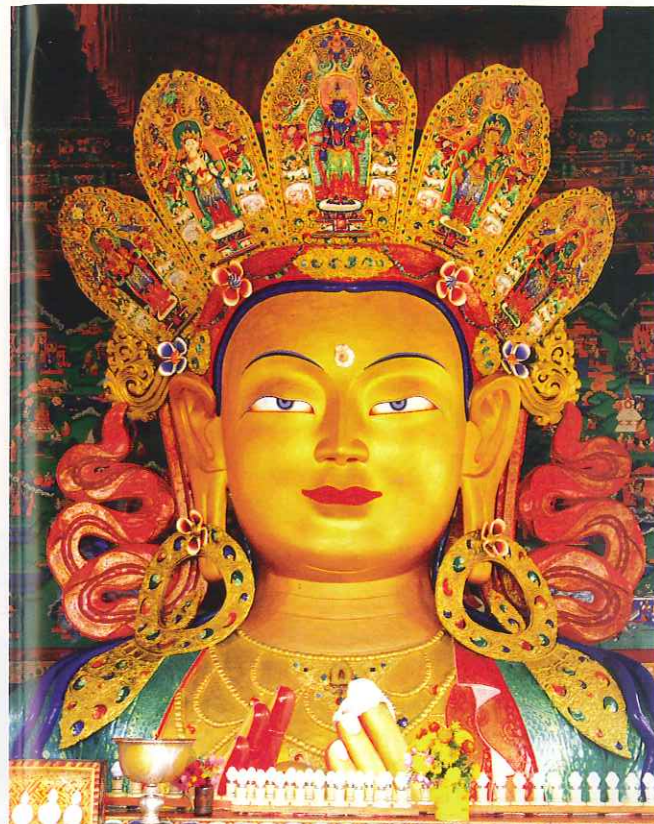
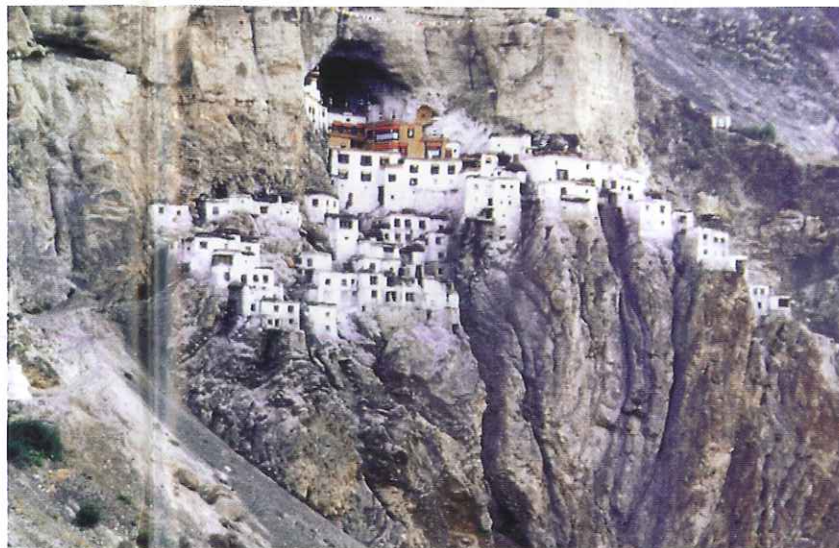
ムンバイ東南130kmのデカン台地の岩山にあるパジャー窟院に、前2世紀階掘の、木造寺院建築を模した最古の型のチャイトヤ窟があります。パジャーに向かい合うカールラ窟院のチャイトヤ窟は、小乗仏教様式の最も完成した最大のものです。ムンバイ東北180kmの国道沿いのナーシク窟院は、同じ小乗期のもので数多くの貴重な碑銘を残しています。またムンバイの北42kmのカーナリー窟院は、海を見下ろす丘の上に109の窟が掘られています。3~8世紀の開掘で小規模のものが多く、往時の僧侶の生活がしのべられます。オーランガバード窟院は、同市の北2kmの岩山の9窟から成り、大乗期のもので、特に第7窟の伶人群像の浮彫りの美しさが有名です。



インドの最北端ラダック地方の仏教聖地

レー

ラダック地方の中心地ともいえるレーは標高3505mでインダス川の北側、谷の中腹に位置する。レーの町を見下ろすのは、9層からなるレー王宮があり、1830年代までラダックの王族が暮らしていました。現在レーにおける仏教の中心であるソーマ僧院はラダック仏教徒教会の本部があります。町の北にあるサンカル僧院には1000本の腕と1000個の頭を持つ哀れみの仏教神、アヴァローキテーシュワラ（観世音菩薩）が印象的です。中心地から北へ遠く離れたチャンスバ村にはラダックが仏教に改宗した8~9世紀のものとする貴重な仏教彫刻があります。レーから8km西へ行くとインダス川上方の丘の頂上にそびえ立つスピトゥク僧院があり、2つの祈祷室には立派な仏像がいくつかあります。レーの南15kmのシェイには現在も機能している僧院があり、また金メッキをした高さ12mの釈迦牟尼大仏はこの地域では最大。シェイからさらに南へ約2km先には美しいゲルク派のティクセ僧院があり、早朝の祈祷に参加することもできます。また別の聖堂には2階までの高さがある弥勒大仏がそびえ、最上階に行くとすぐに大きな金の頭に目が釘付けになり印象的です。そのほか多数の僧院やストゥーパなどがレー周辺にあります。



古代都市の遺跡と祇園精舎 スラヴァスティ

ラクノウから134km、バルランプールからは29kmに位置するスラヴァスティは、サハート・マハートの村の近くにある。古代コーサラ王朝の都で、24回の雨季に渡りブッダをジェットヴァナ庭園に保護した地として広く知られるようになりました。神話に出てくるサラヴァスト王によって築かれたと伝えられるスラヴァスティには、古い仏塔や壮大な僧院、また寺院などがあります。ブッダはこの地でいくつかの奇跡を起こしたと伝えられています。この神聖な地には、他にもブッダの高弟であったアーナンダが植えたものの一つとされる有名なアーナンダの菩提樹があります。



インド最大の仏教僧院 タワン

インド最東端のアルナーチャル・プラデッシュ州西部に位置するタワンにはインド最大の仏教僧院があり、雪を頂いた山々を背景にたたずむ姿は荘厳です。タワンには現在500人以上のラマ僧が住み、古い布製仏画の見事なコレクションがあります。また祈祷堂には巨大な釈迦牟尼の像が安置されています。10月にはブッダ・マホトサワ・フェスティバル、12月にはトルグヤ・フェスティバルと重要な祭が開かれます。またタワンから東へ数キロ先にボンディラの街があり、ここにも仏教徒の僧院が2つあります。

